

特集 魔法の習慣12

第2章

「楽」を極め、人とつながる

——書道家 武田 双雲さん



安田 雅哉

東京都中小企業診断士協会中央支部

1. 人を魅了する

「すみません、もう出かけるので……」

しまった、取材者のほうが話しすぎた。Zoom取材の接続テストでの一コマである。

今をときめく書道家、武田双雲さんは、どこまでも聞き上手である。そのため、こちらにも身構えないで、つい話してしまう。話しすぎて次の予定に食い込んでしまった結果が、冒頭の武田さんのコメントである。



書を通じて「楽」を極める（提供：双雲事務所）

武田さんは、書家・武田双葉氏の長男として生まれた。大学の理工学部を卒業後、大企業に就職したが、3年ほど勤務した後、書道家として独立した。独立後は、音楽家、彫刻家など、さまざまなアーティストとコラボレーションを行い、斬新な個展を展開、独自の創作活動でメディアの注目を集める。

映画「春の雪」、映画「北の零年」、NHK大河ドラマ「天地人」をはじめ、世界遺産「平泉」、スーパーコンピュータ「京」、「美空ひばり」など、数多くの題字、ロゴを手がけた。また、企業や個人からも依頼を受け、そのビジョンを書で揮毫している。

その活躍は国内だけでなく、ロシア、スイス、ベルギー、ベトナム、インドネシアなど、世界中から依頼を受けて、パフォーマンス書道や書道ワークショップを展開している。

そのような武田さんに、我々はZoom取材を申し込んだ。取材2日前に接続テストを実施したところ、秘書の方でなく、まさかのご本人が対応。そのまま雑談が始まり、双雲ワールドに引き込まれた。著名人でありながら、まったく気取らない。人間愛にあふれた武田さんの語り口は聞き手を魅了する。

この桁違いの包容力を持つ武田さんは、いったいどのような魔法の習慣を持っているのか。中小企業診断士が参考にすべき要素はあるのだろうか。

そして、武田さんへのインタビュー当日を迎えた。

2. 祈ると通じる

このタイトルは宗教の話ではない。武田さんの習慣のことである。日本人は、神社仏閣にお参りするとき手を合わせてお祈りをする。これが“正の波動”を呼ぶのだという。いったい何のことだかわからない。武田さんは言う。

「僕は物理オタクなのです。物理を通して世界を見ます。祈ることで分子が共鳴し、正の効果を生むことは、科学的にラットの実験で証明されているのです」

彼の中では、森羅万象を物理学で解明するダイナミズムが働いているようだ。人間同士の関係も分子の作用だという。面白い発想だ。武田さんは続ける。

「祈ることで行為を見える化します。それが正の波動を生むのです」

制作に取り組むときにも、まず祈る。これが武田さんの考え方、そして成功を呼び寄せる魔法の習慣の1つなのである。



Zoom取材でも祈る

3. 自分の軸となる漢字「楽」

武田さんは書道家として独立した。それは、人々を幸せにしたいという思いからだった。独立にあたっては、まず自分の軸となる漢字を決めようと考えたという。「恵」、「心」など、さまざまな漢字が浮かんで消えた。そして行きついたのが、「楽」という漢字である。

「楽には2つの意味があります。楽しむ、そして楽をする、つまりリラックスすることです」

さっそく定めた漢字「楽」を、自分で半紙にしたためて壁に飾る。すると不思議なことに、自分の行動を常にチェックするようになったという。自分は楽しんでいたか、リラックスしていたか、仕事するときだけでなく、玄関を入るとき、服を着替えるとき、歯を磨くときに至るまで、自分の行為を常に意識するようになったという。

そして、現在もまだ足りないとして「楽」の世界を追究している。あるときには、玄関を入るときに力んでいたと思い直して再度入り直すほどの徹底ぶりである。

つまり、武田さんは「楽」の世界を極めようとしているのである。この自分の行動チェックを始めて20年、普通の人よりは楽しむ術を学んでいるものの、自分ではまだまだ足りないと感じ続けている。常にグレードアップの努力を怠らない。これも武田さんの魔法の習慣の大きな1つである。

武田さんの非凡なところは、「楽」の世界を独り占めにしないこと。自分が楽しみ、リラックスするとともに、自分にかかわるすべての人が楽しみ、リラックスできているか、常に気を配っている。

自分が「楽」を得るだけでなく、他人にも「楽」を与えたいという心の習慣である。

4. スランプからの脱出法

武田さんは、スランプに陥らないように日々心がけている。それでも、今から9年前、2011年には大きなスランプに陥ってしまった。ちょうどNHK大河ドラマ「天地人」の題字揮毫、テレビ出演、書籍出版など多忙を極めていた時期である。知らず知らずのうちに過労が体を蝕み、ついには胆石を患ってしまった。

「ある日、突然体が重くなって、それからです。いつ痛みが来るかわからない、吐き気もする、そして気が滅入る。一番怖かったの

は、これがいつ完治するかわからない、先が見えない、ということでした」

いくら楽しもうと思っても、自分が健康でなければ楽しんだりリラックスしたりはできない。このときは、さすがに武田さんも堪えた。

(1) 周りの人の力で乗り越える

スランプを経験したとき、武田さんはどう乗り越えたのか。普通の人と同じように食事療法をしたり、テニスを始めたりもした。仕事も半分に減らした。

しかし、最も助けになったのは支援してくれる人たちの声だったという。自分の体調が悪いことを周囲にカミングアウトした。そうすると、書道教室の生徒や仕事仲間が共感の声をかけてくれるようになった。

「私のポジティブな部分だけでなく、弱いところも見てもらったことで、私自身も楽になりました。そして何よりも、弱っている人の心がわかるようになったのです。これは表現者である私にとって、大きな気づきでした」

実際にスランプから抜け出せたのは、病気が完治した3年後。しかし、スランプ期間の支援者の存在は精神的に大きな支えになったようだ。普段から周囲の人と良好な関係を築いていた武田さんならではのスランプ脱出方法といえる。



周りの人に「感謝」(提供: 双雲事務所)

(2) まずは自分の心身の健康

病を経て武田さんが感じたこと。それは、自分の体調が悪いときに他人のことを考える余裕は持てない、つまり、人を楽しませるためには、まず自分の心身の健康を保たなくてはいけないということである。

「この順番を守らないと倒れるということが、よくわかりました。大きな学びでした。無理はするなということ。無理は長続きしません。もちろん、若いときは無理していると認めたくない部分はあるのですが……」

武田さんが病から学んだのは、これだけではない。武田さんは「楽しめていないとき、リラックスできていないときに、それを認めないのが一番いけない。自分の心に正直になる、弱い自分を認めることが大事です。病気になると本当はとて怖い。それなのに強がっていると、自分に嘘をつくことになります。この『無理やりポジティブ』という心が、最も危ない考え方だと思います」と言う。

それでは、武田さんは病気を乗り越え、現在は心身ともに楽しめているのだろうか。実は、そうではないらしい。

「楽しみ方、リラクスの仕方が下手だと思います。まだまだです」

どこまでも自分に対するハードルは高い。求めるレベルを高く置き、それに向けて努力する。これも武田さんの魔法の習慣といえるだろう。

そんな武田さんが、最も楽しいときを聞いてみた。

「一緒に個展を開催したメンバーやスタッフから、『こんなに楽しく仕事できた経験は初めてです』とか、『この仕事をきっかけに肩の荷が下りました』といった声をもらえると、とても嬉しいです。これまで、『楽しく、リラックスする』という価値観を大事に行動してきました。その波動を人にも伝えようと長年鍛えてきたのですが、それが相手に伝わって、喜びの声になって自分に戻ってくる。やってきたことが間違っていなかったと思えて、嬉しいのです」

5. 自信などいない

独立当初、前衛的な創作活動を展開していたことで、批判を浴びた経験もある。

『君のは書道ではない』などと、批判を受けたことがありました。傷つき、頭に来て、自信もなくし、もう活動をやめようと思ったこともありました」

そのとき、武田さんはどう乗り越えたのか。「救いの神が現れるのです。『双雲さんの書、言葉のおかげで人生を救われました』とか、『思い詰めていましたが、すっきり晴れやかな気持ちになりました』などと言われると、やめるにやめられません。私は、自分に絶対的な自信は持っていません。だからこそ、多種多様なことを試せる。そして、たとえ一部の人々にでも心に響く作品を提供できれば、それでよいと思うようになりました。自信がないからこそ、数が打てる。100の作品を出せば、そのうちの1くらいは、ある人の人生を大きく変えられるかもしれない。そういうものが提供できれば、本望です」

武田さんは常にチャレンジし続けている。これもプロの習慣といえるだろう。



さまざまな作品を試す (提供: 双雲事務所)

6. 中小企業診断士を楽しんで

インタビューを締めくくるにあたり、中小企業診断士へのメッセージをいただいた。

「とにかく、楽しんでほしいと思います。中小企業診断士といえば、中小企業のお医者さん。診断先の経営状態が、数字から見えてくることもあるでしょうし、社長さんの様子からわかることもあるでしょう。そうした現象のすべてを楽しみながら、その背景を読み解く。これは、面白い営みだと思います。小学生のとき、10人が『この指とまれ』と皆に声をかけたら、一番楽しそうな子に人が集まっていたはずですよ。人とは、そういうものだと思います。そのように楽しく仕事をする中小企業診断士を目指してほしいです」

科学雑誌「Newton」を愛読し、物理学をこよなく愛する書道家、武田双雲さんの発想のベースは、あくまでも「楽」なのである。

武田 双雲

(たけだ そううん)

書道家。1975年熊本県生まれ。東京理科大学理工学部卒業後、日本電信電話株式会社 (NTT) 入社。書道家として独立後は、NHK 大河ドラマ「天地人」や世界遺産「平泉」などの題字を手がける。ベストセラーの『ポジティブの教科書』(主婦の友社)をはじめ、著書も多数。



安田 雅哉

(やすだ まさや)

1970年鳥取県生まれ。京都大学工学研究科修了。プラント建設会社、電機会社を経て商社勤務。2018年から東南アジアの事業会社へ赴任し経営管理を担当。2020年中小企業診断士登録。ファイナンシャルプランナー。

